



道輝先生30年祭「お礼申し上げます」  
孫の加藤良君と（昭和63年12月）

## 教会月報

# あつた

金光教熱田教会

No.727 2019.7

メール [attakai@nifty.com](mailto:attakai@nifty.com)

<http://attakai.life.cocan.jp/>

### 「道輝物語」 教会長

今年も早、後半に入った。「年を取ると時間が早く過ぎるように感じるのは、トキメキがないからー！」と「チコちゃん」が教えてくれた。正に「ポーンと生きてんじゃねーよ！」がその原因だ。少しでも「ポーンと生きて」いない下半期にしたい。

今月二十日は、先代鈴木道輝師の満三十年の命日である。当日には月例祭に併せて「命日祭」をお仕えさせていただくが、三十年間「ポーンと生きて」きてしまっていないか反省しきりである。

三十年を機に、「道輝物語」を執筆している。センスがないので小説風に書きたくても書けないのが残念だが、少しでも先代の生きざまが伝わればと思っている。

執筆に当たって、先代が書き残した月報の原稿を読み返した。特に彼の生涯に関わったもの、親族についてのものを改めて拾ったのだが、その中にとってもシヨッキングなものがあった。私はこれまでそれをうかつにも読みこぼしていた。それは長兄忠道氏についてのものであった。それによると、先代にとって兄忠道は「厳しく冷酷な」存在で、先代が失意の中、十五才で松本に戻

ったとき、中国へ行っていた兄から、「男子が一度願いを立てて出たからには、たとえどんな苦難に出会っても辛抱しぬくことが成功する道だ。お前のような者は、これから先もみんなに迷惑をかけるから死ね」という手紙が送られてきた。弱冠十五才の少年が、兄から「死ね」「生きる価値がない」とまで書かれたと知って、私は衝撃を受けた。胸が痛くなった。

人間だれしも、落ち込んだことはあろう。その時「自分は世の中で必要とされているか？」「生きていいののか」と自問したことはあるのではないか。しかしその落ち込んだ時に、他の人から「お前は生きる価値がないから死ね」などと言われた人はなからう。それこそ自死を考えるに十分だ。

先代は、少年時代にそんな経験をしていたのだ。

兄忠道は二十才で亡くなっているので、彼がそんな手紙を書き送った真意を知る術はもうない。しかし先代は、そこを姉の言葉と修行生として受け入れてくれた名古屋教会三代谷村萬蔵先生によって救われた。そして私には、「兄忠道は秀才で、こんなきれいな字を書いているのだよ」と、兄のことを敬意をもって私に話して聞かせた。そのとき私は『若くして亡くなってもつたいない。忠道伯父さんに会ってみたかった』と思った。

厳しい叱責の言葉や不遇な状況を乗り越えて、糧としてきた先代の生きざまを、今誇りに思う。

